

修士学位請求論文要旨

ボランティアと他力—木越康『ボランティアは親鸞の教えに反するのか』を手がかりに—
国際日本学研究科国際日本学専攻文化・思想研究領域

4911146001

庄野龍真

ボランティアと他力—木越康『ボランティアは親鸞の教えに反するのか』を手がかりに—

●要旨

第一部、ボランティアは親鸞の教えには反し「ない」こと

近年、仏教と社会的実践、または日本の宗教と社会的実践との関係を円滑にしようとする試みが見られる。例えば「エンゲージド・ブディズム」であり、「還相社会学」という考えであり、「臨床宗教師」という考え、もしくは活動である。仏教は、例えばキリスト教に比して、また日本の宗教は、他国の宗教に比して、社会的実践活動が希薄であることが指摘されてきた。例えば先の三つの考えや活動は、こうした問題に一石投じられるものであり、多くの人々が関心をもち、活動に関わってもいる。

しかし、ここに問題はないだろうか。その典型として考えられるのが、キリスト教におけるいわゆる「負の歴史」である。つまり、社会に積極的に関与しようとした結果、思わぬ方向に問題が進み、助けようとする行為がむしろ人を傷つけるに至る可能性があるということである。

そこで我々に必要なのは「批判」精神ではないかというのが、本稿の一つの大きな問題となった。菱木政晴は「浄土」を「批判原理」として捉えたが、こうした宗教における「批判」精神について、本稿では独自の視点から考察した。

その視点というのが、「ボランティアは親鸞の教えに反するのか」という問題を軸にした考察である。

2011年3月11日に起こった東日本大震災を我々は決して忘れることができない。当時19歳であった筆者は、当時住んでいた京都からテレビでその様子を見つめたが、現地に行きたい気持ちを抱えながら、結局9ヶ月間の間を置いてようやく現地に向かうに至った。なぜすぐには言わずとも、再三現地に向かうチャンスがあったにも関わらず、行くことをしなかったのか。そこには数々の原因が考えられるが、その一つに先に示した「ボランティアは親鸞の教えに反するのか」という問いに関わる問題が筆者にあったことは疑い得ない。

この「ボランティアは親鸞の教えに反するのか」という言葉は、木越康『ボランティアは親鸞の教えに反するのか——他力理解の相克——』（法蔵館、2016年3月）からそのまま取ってきたものである。木越は、真宗大谷派と深く関わる大谷大学で真宗学を講ずる教授であるが、彼が真宗大谷派のボランティア委員会メンバーとして東日本大震災に関わる中で触れたこの問題について取り上げたのが本書である。

木越は具体的には三回、ボランティアは親鸞の教えに反するのではないかとといった類いの問いをぶつけられた経験があるが、なぜこうした問いが出てくるのか。真宗には自力に

対して他力を、雑行に対して念仏一つを強調する側面が強く、これが、他者に何らかの行為を施すことは自力であるため、避けるべきだ、や、他者支援は雑行に値するから、それよりも念仏すべきだなどと主張される根拠になるということである。

「他力」や「念仏」の教えが真宗にあることは事実であるが、それが「ボランティアをすべきでない」という内容の根拠になり得るか考えれば、それは、木越によれば否である。しかし、言葉で他力や念仏が勧められているのに、なぜそうした方向に進もうとする態度が否定されることになるのか。そこでキーワードとなるのが、「罪福信」である。

これは、善いことをすれば善いことが起こる、悪いことをすれば悪いことが起こるといった、善因善果、悪因悪果を信じることであり、先に他力を信じる「べき」、や、念仏す「べき」という言葉を示したが、こうした規範的表現の裏には、他力を信じることや念仏することが、弥陀に任せるのでなく、自己の計らいから生じているという態度があるため、それでは本当に弥陀を信じることができているということである。つまり、他力を信じる後ろに、むしろそれとは反対の自力的発想が潜んでいるということである。

ではこの問題はいかに解決され得るか。そこで木越が問題にするのが、「宿業」である。

宿業とは、「無限の過去からの身口意の行為や経験が、その人の今に決定的な影響を与えつつ、存在そのものに宿っていること」を意味する。すると、善であれ悪であれ「意図的に」なされる行為はあり得ないことになる。すると、他力を信じることも念仏することも「意図的に」なされることはあり得ないことになり、他力を信じる「べき」や、念仏す「べき」といった規範的言葉の無効性が露わになるということである。

そして木越によれば、こうした「宿業という人間理解の視点に立てば」、「ボランティアに常につきまとう〈偽善〉という不安や批判も〔中略〕、乗り越えることができる」。しかし、これで本当に問題を「乗り越える」ことができるのか、筆者には疑問であった。

第二部、言葉の有効性

木越はその書最終章で、「仏教者であること、真宗者であること」という章を設け、「大乘仏教としての親鸞思想」という問題から始め、浄土真宗を生きるものの〈しるし〉という問題へと展開し、親鸞が「極めて稀に」、「極めて特殊な状況下で」、真宗者は「他者に対して心を込めて親身となれる」という〈しるし〉が生まれるという内容を示している。そしてその上で、その書の最後に、仏教や真宗を学ぶ者は、「災害時にどうやって海外へ避難するかを考える人間よりも、どのように現地向かい、何ができるのかに頭を悩ます人間に〔中略〕ならなくてはならない」と主張している。

このように木越は、罪福信から宿業に至る議論で一旦は規範的表現の無効性を示し、この最終章でもそのことを注意する言葉を複数回残すのであるが、最終的には規範的表現を用いるに至ったということである。すると、再びこの言葉から罪福信に関係する問題が出てくるのは目に見えており、本当に問題を乗り越えることができているか疑問ということ

である。では我々は最終的にいかに述べることができるのか。

この問題に対し、正面からの議論はもはや無効である。そこで筆者が手がかりとしたのが、池上哲司の論であった。

池上は宗教を「倫理の限界を越えたもの」の「理念」として捉える。そして彼はこの領域を強調することで「言葉の無力」を主張する。つまり、あらゆる規範的表現は、最終的には人間の力に耐えられるものではないため、究極的には人間の言葉に有力なものはないということである。この意味で、この主張は木越の前半の内容と類似したものと見なすことができる。

ただ、池上において、ここからの議論が、木越のそれとは異なることになる。つまり、池上の場合、ここから、言語の「使い方」に問題が収斂していく。つまり、我々がいかなる言葉遣いをするかにこだわるというよりもむしろ、その言葉がいかなる脈絡で使われているかに注目するという視点である。池上によれば、「有効範囲を意識した言葉」という表現である。

こうした角度を見出すとき、我々はニヒリズムの問題に正面から覆われるというよりもむしろ、そのニヒリズムの問題についてまで言語化可能な領域を開くことができる。すると、木越が最終的に規範的表現を用いたことに対しても、その文面にこだわるというよりもむしろ、その言葉が使われるに至った経緯を読者は重視しなければならないということである。